【60周年記念企画】

表現学会　回顧

中島　一裕

十年一昔と言うが、学会の五十周年記念大会も昔のことになり、今年は六十周年の節目の年になるという。五十周年の前後には、学会創設に関わった発起人の先生のお話を伺う機会があった。外山滋比古先生はお茶の水女子大学の大会での講演で、永田友市先生は五十周年の記念大会の懇親会で、創設時の御苦心を語られた。お二人のお話が、学会の創設と維持存続に力を尽くされた今井文男先生に及んだのは当然として、意外だったのは、永田先生が「表現学会は、今井文男、松永信一両氏の主唱によって創設された」という話をされたことであった。松永信一先生のお名前には聞き及んでいたが、私が学会に参加した時にはすでに物故されていて、その謦咳に触れることはなかった。そして、こうした話をなさったお二人の先生もこの10年の間に相次いで鬼籍に入られた。

私がはじめて表現学会の大会に参加したのは、1974年の愛媛大学での大会の時だった。まだ大阪教育大学の学部4回生の時であった。当時、大阪教育大学には、土部弘、神尾暢子、早川勝広、小田迪夫といった先生がいらっしゃり、表現学会をメインの活動の場とし、またその運営にも携わっておられた。さらにその年長には、弥吉菅一先生がいた。弥吉先生というのは、芭蕉研究と児童詩研究の二つの分野で業績をお持ちの先生で、表現学会の発起人に名を連ねた方である。こうした状況の中で学生時代、大学院生時代を過ごした私にとって、表現学会は、第1次的研究環境であった。

創設以来、表現学会は事務局長であった今井文男先生が切り盛りされるところが大きかったが、学会員を非常に大事になさった。それは、『表現研究』の空きスペースがあると、学会員の業績紹介をなさったところや若手の研究者に発表を慫慂されたところに現れていた。私が大学院へ進んで間もなく研究発表をしたのも、今井先生のご指示であった。こうした今井先生の情熱やそれを支える周辺の先生方の御苦労が伝わるせいか、表現学会の懇親会というと、和気藹々とした楽しいものであった。当時はまだ、ホテルや料亭の広間の座敷での宴会という形式が残っていた。そんなときには、親しい先生や先輩から、仲間内で固まっていないで、年長の先生にビールか徳利を持って挨拶するようにと指導を受けたものだった。印象深い懇親会もいくつかあったが、最も強く印象に残っているのは、1985年の岐阜大会の時のことで、長良川の鵜飼を鑑賞しながらの懇親会であった。大会1日目のプログラムが終わったあと、40数名の参加者が、長良川の日の落ちかかった船着き場から二隻の鵜飼舟に分乗して川へ漕ぎ出し、やがて日の落ちた川面を照らす篝火に鵜飼の模様を楽しみながら酒宴を張ったのだった。当時岐阜女子短期大学におられた根岸正純先生のご配慮だったと記憶している。

表現学会はまた、各地区の例会活動の盛んな学会でもあった。ところが、私の属している近畿ブロックでは、なかなか地区例会が成立しなかった。創設時からのメンバーに大阪市立大の塚原鉄雄先生、大阪教育大の土部弘先生らがおられ、学会には熱心に参加なさっていたが、それぞれ別に独立した研究会を主催されていた、といった事情があってのことだったと思う。やがって、近畿例会は、1997年になって、やっと活動を始めることができた。当時、相前後して学会の代表理事を務められた秋本守英、石黒昭博、糸井通浩の各先生方のご尽力によるものであった。当初は、学会員の所属大学の持ち回りで開催されていたが、近年は、会場が同志社大学に固定され、山内信幸、藤井俊博両先生に運営の労をお取りいただいている。

冒頭に記した表現学会50周年は、その数年前から記念行事の事業計画が進められたが、結局、学会員の既出論文を分野・領域別に網羅したアンソロジーの編集刊行と学会50年誌の刊行とを2本の柱とすることにし、中堅の研究者の多い近畿地区が前者を、当時の代表理事であった半沢幹一先生がいらっしゃる東京地区が後者を担当することになった。近畿地区では早速糸井通浩先生を中心に編集委員会が組織され、50周年の記念大会直前に3巻からなる論文集を刊行することができたのであった。

「表現研究」第100号の記念エッセーの中で、藤井俊博先生が、第50号までは基礎的原理を開拓しようとする論文が多く、第50号以降は応用的・実践的論文が多く見られる、と感想を述べておられる。たしかに、今井、松永両先生をはじめとして、発起人の先生方の中には、自らの表現理論の構築に意欲的な先生がいらっしゃり、いきおい、その論文、御著書には、体系的・思弁的傾向が見られた。当時、言語研究の分野のみならず、文芸評論や国語科教育の世界でも新たな表現理論が求められていたという時代の趨勢もあった。初期の表現学会で、こうした言語表現の理論的考察が続けられたことが、学会の基盤になり、現在も運営の基本になっていると思う。

表現学会は、学会名称として「表現」という漠然とした対象を示し、会則第二条で「言語研究に関する研究」と、さらに対象を限定するという行き方をしている。この名づけ方に妙味があったと思う。60年の間に、言語表現を取り巻く環境も、言語表現自体も大きく変わった。手書きの通信は、メール、ラインに取って代わられた。目下は、言語表現自体が、生成AIに任せられつつある状況である。言語教育も、国語教育から日本語教育へと軸足が移ってきた。こうした情勢の変化に伴って、言語の質の変化、いわば、重厚な日本語からやさしい日本語への変化の可否を問う声も挙がりつつある。こうした趨勢のもと、表現学会も変貌してゆくであろうが、時代の要請に対応しつつ、言語表現の不易と流行とを追求する学会でありたいものである。